

永田町新潮流 平沢勝栄



検察庁法改正案について、安倍晋三首相は「国民の声に耳を傾けることが必要」として、今国会での成立を断念した。

国民の信頼を失った。この回復は容易ではない。今後、検察はひるむことなく社会悪に

その直後に、黒川弘務前東京高検検事長の賭けマージャン疑惑が報道されている。私は衆院法務委員会に属していた関係で、黒川氏とはよく話し合った。気さくでざっくばらん、そして低姿勢な人だった。賭けマージャンで検察人生の最後にミソをつけてしまったが、このことは、黒川氏にとって一生の不覚だろう。検察も今回のことでは大き

新型コロナに「誠実に向き合い闘う」

切り込んで、社会正義の実現に努めていくべきだ。それが検察にとって、失われた信頼を回復する唯一の方法だろう。

ところで、新型コロナウィルスをめぐる問題で、国内初の感染者が出たと確認されたのは1月16日だった。



緊急事態宣言が解除されても、新型コロナとの戦いは続く—東京・渋谷

力を入れてくるのではないか。私は最近、数十年ぶりにアルベール・カミュの名著『ペスト』（新潮文庫）を再読してみた。

これは、ペストの流行で都市封鎖された、アルジェリアのオラン市の人間模様を描いた小説である。小説とはいえ、そのストーリーは欧州でかつて起こったことの隠喩だ

対応と酷似している。

その医師は「ペストと闘う唯一の方法は誠実さということだ。そして、その誠実さとは、自分の職務を果たすことだ」と言う。

今回の新型コロナ問題で、ほとんどの日本国民は、外出自粛や営業自粛などで当局に積極的に協力し、感染拡大を防いでいる。

前出の医師の言う「誠実さ」とは、こうした協力のことを意味するのではないだろうか。

人類の歴史は「感染症との闘いの歴史」でもあった。この闘いはこれからも続くだろう。

私たちの務めは、今回の新型コロナ問題から多くの教訓をくみ取り、それを後の世代に伝えていくことだと考える。（自民党衆議院議員）

以来、今日まで日本はPCR検査数が少なく、そして強制力のない「緊急事態宣言」のなかで、極端に感染者も死者数も少ないという結果が諸外国との比較で出ている。このことは海外にとって大きな謎のようだ。今後、世界は不思議な国 日本が研究に

ともいわれており、多くの点で新型コロナ問題とも重なりあっている。主人公の医師は、ネズミの死体や原因不明の熱病者の続出からペストの流行を疑う。しかし、当局は当初、この訴えを退ける。これは新型コロナ問題で中国が初期にとった